人文系ダブルディグリープログラムの構築

海外交流

真　嶋　潤　子*

Establishment of a Double-Degree Program in the field of Humanity

Key Words：Double-Degree, Applied Linguistics, Japanese Education

はじめに

私が勤務する大阪大学では、「ASEAN と日本の次世代を担う先導的高度グローバル人材の育成と『質の高い成長』への貢献」を目的とする「ASEAN キャンパス構想」が進められている。これは、教育面に限って言えば、タイ、インドネシア、ベトナム、ブルネイの四カ国における大学・機関の協力のもと、修士・博士の共同学位プログラムを有する海外「キャンパス」を設置しようとするもので31年度の本格稼働を目指している。

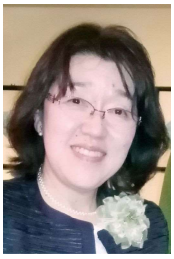
そのなか、特にタイでは、学術交流協定校であるマヒドン大学に本学の微生物研究所や工学研究科のラボがあり、また、バイオテクノロジー分野でのダブルディグリープログラムもすでに動いていることから、いち早く、昨年の12月に、現行の大学間学術交流協定のもとジョイント・キャンパス設置にかかる付属文書が取り交わされた。そして、それを受けて、今年の1月には相手側教養学部と本学大学院言語文化研究科とで、大阪大学においては、人文系プログラムとしては初めての例となる、応用言語学に関するダブルディグリープログラム（修士）協定が調印された。

（大阪大学箕面キャンパスでの調印式）

言語文化研究科日本語・日本文化専攻について

今回のダブルディグリープログラムは、大阪大学側では大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻が主体となるものである。本専攻は、平成24年（2012年）4月1日に発足したが、その歴史は古く、昭和52年（1977年）に設置された旧大阪外国語大学大学院外国語研究科日本語学専攻（修士課程）にさかのぼる。この修士課程は、昭和29年（1954年）に設立された旧大阪外国語大学留学生別科（「大阪大学日本語日本文化教育センター」の前身）を端緒として生まれた。当時、国費の留学生に対する日本語教育は東京外国語大学と大阪外国語大学の二カ所のみで行われており、まだ日本語教育という言葉も一般に認知されていなかった。そのような状況の中で、日本語と日本文化を世界の言語、文化の一つと位置付けて研究する人材、日本語が母語でない人々に日本語を教育する人材を育てるための大学院が日本で初めて作られたのである。

昭和62年（1987年）には旧大阪外国語大学外国語学部に日本語学科が設置され、平成14年（2002年）には博士後期課程ができ、学部から博士前期・後期



* Junko MAJIMA
1959年5月生まれ
University of Georgia, Athens（米国　ジョージア大学）教育大学院　博士後期課程　外国語教育学専攻修了（1994年）
現在、大阪大学　大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻　教授　専攻長
教育学博士（Ed. D.）　日本語教育学、外国語教育学
TEL：072-730-5192（研究室直通）
FAX：072-730-5192
E-mail：jmajima@lang.osaka-u.ac.jp

課程までがつながることになる。そして、平成19年（2007年）の大阪大学との統合を経て、平成24年（2012年）に専攻として独立、設置後の5年間だけでも、約120名の修士号取得者と40名近くの博士号取得者を輩出し、日本を含めた世界各地の教育研究機関等に送り出してきた。

特に東南アジア諸国の中で、日本語教育環境の整備が進むタイにおいては、すでにチュラーロンコーン大学、マヒドン大学、タマサート大学など12大学で大学院の修了生が教員として活躍しており、今回のダブルディグリープログラム開設に当たっても、修了生の助力がなければ、早期の実現は困難であったといえよう。

応用言語学ダブルディグリープログラムについて

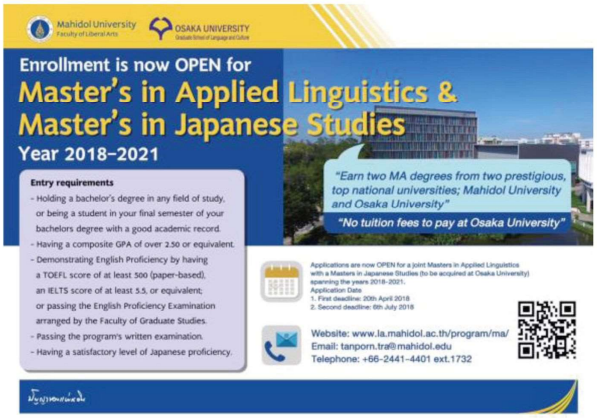
タイの主要大学は、日本語・日本文化分野での大学院課程を有しており、これまでも本専攻とのダブルディグリープログラム設置の話はあったが、それが立ち消えたのはタイ側に需要があっても本学側の学生にとっては、現地にまで行って日本語学、あるいは日本語教育学を専攻する意義というものが見出せないからである。もちろん、タイ語と日本語の対照に興味を持つ学生もいるであろう。しかし、その需要はかなり限定的である。

この点が解決できたのは、マヒドン大学教養学部が応用言語学に関する大学院課程を有していたからである。応用言語学とは、「一般に言語の獲得・習得、言語教育を研究対象とする学問のこと」であり、マヒドン大学では、英語教員養成を目的に、英語を教授言語とした修士課程が置かれていた。そこで出てきたのが、本学における日本語教師養成の目的と組み合わせた、日英両言語を研究対象とする応用言語学分野でのダブルディグリープログラム実現の可能性であった。

実際に相手側院生の中には日本語が堪能な者がおり、その逆もまた真であった。その上、英語教育であろうと、日本語教育であろうと言語教育である以上、基礎領域はかなり重複しており、両大学での研究が相互にプラスに働き、過重な負担を強いることなく論文執筆ができる。さらにダブルディグリーが例えば、中等教育機関への就職に有利に働くだろうとの期待もあった。

ここに双方の意見が一致し、大学レベルでのジョイント・キャンパス開設交渉の後押しを得た昨年6月以降に一気に話が進み、協定締結に至るのである。

ダブルディグリープログラムというのは、英語を共通の教授言語として実施されることが多いが、人文系、ましてや言語を扱う分野では、このこと自体が実現への大きな障壁となる。しかし、今回のように教授言語を異にすることも、相手側の実情にうまく沿えれば可能なのである。現在、8月を学期始まりとするマヒドン大学では、以下のようにHPを通して募集を開始しており、かなりの反響があるとのことである。



大阪大学ASEANキャンパス構想における応用言語学ダブルディグリープログラム開設の意義

すでに、マヒドン大学教養学部の一角に、現地での教育・研究指導のため、TV会議システムを完備したセミナー室兼オフィス（ジョイント・キャンパス）が設置され、今年の3月には教員間の共同研究を推進するためにセミナーも開催されている。

（TV会議システムの運用）

（セミナーの様子）

現地での教育・研究指導の充実のため、集中講義のための教員派遣や常駐教員の赴任も計画されているが、理系分野を中心とする大阪大学ASEANキャンパス構想に、本専攻を主体とするプログラムが加わったことの意義は大きい。それは、タイだけでな

く、インドネシア、ベトナム、ブルネイに設置されるキャンパスで学ぶ学生の日本語学習支援体制が構築できるからである。

理系分野の研究には英語だけで十分なのであろうか。日本語の学習はコミュニケーションの手段を学ぶと同時に思考方法の訓練でもある。新たな発見や創意は、言語学習から生み出されることも忘れてはならない。

実際的には、常駐の教員がいれば、バンコックから各キャンパスに出張し、日本語集中コースも開設できるであろうし、それを補完する遠隔授業カリキュラムの開発・実施も容易になる。そしてダブルディグリープログラム参加学生にとっては、日本語教師になるための実践の場ともなるのである。